

外国語を学ぶ楽しさ

齋藤 純一

この世に言語はいくつあるだろうか？言語学者の調査によると少なくとも6000種類の言語がこの世に存在するということである。恐らく皆さんの多くは英語を小さい頃より習ってきたはずなので、英語で十分この世の中は事足りると考えているかもしれない。しかし中南米やアフリカ、或いは東南アジアなどを旅して、英語だけでは現地の人々と上手く意思疎通できないと感じたかもしれない。確かに中南米のベネズエラやパナマなどで、英語で“Hello!”というより、“Buenos dias!”と言った方が現地の人々は胸襟を開いて話し相手になってくれるかもしれない。筆者もパナマ共和国を訪れたときに、現地の遺跡を見てきたいので、タクシーを頼んだが運転手は英語を全く解さなかった。行き先と値段の交渉は英語ではなく、公用語のスペイン語でなくてはならなかった。英米人なら英語で通すであろうが、英語を母国語としない人間にとって英語だけで意思疎通を図ろうとするのは、よほど英語が堪能でない限り避けた方が良いかもしれない。

英語で通すか、現地の言葉を少しでも学んでおいて実際に使ってみるかは、賛否両論あるであろう。筆者は英文科出身なので、初めて海外旅行をした時は常に英語で通すようにと引率の教員から指示されていた。仮にドイツ語、フランス語、スペイン語或いはイタリア語などを話しても挨拶程度しかできないので、無理して話すとコミュニケーションに支障をきたすと逆に諭された。一緒にいた上級生も英語以外の言葉を使うことにあまり良い思いを抱いていなかったように記憶している。特に買い物の際は値段の交渉が必要なので、いくらイタリアだからといってもイタリア語で数字を正確に聞きとるのは不可能である。こちらがカモにされるのは目に見えている。しかし最初に“Buongiorno!”と行ってから店に入るか、露店の人に挨拶するのは現地では常識である。当時はヨーロッパでも各国が独自の伝統を打ち出して、観光地でも現地の言葉を堂々と旅行者に対して使っていた。あるお土産店に入ったとき小物を購入したくて、現物を持って行き、店の人に“Prego, per favore!”と言っただけであったが、店の人は最初イタリア語で数字を言っていたが、こちらが数字を理解するのに苦労しているのを察して、ゆっくりとした英語で言い換えてくれた。一見すると何でもないことのようにであるが、最初からいきなり早口の和製英語で話しかけると店の人もあまり良い印象を抱かなかっただろう。特にヨーロッパでは中世以来の伝統に誇りを持つイタリアである。英語で道を聞いても今でもイタリア語で返す現地の人々の数は多い。ローマやベネチア或い

はミラノといった都市ではイタリア政府も観光に力を入れているので、何とか和製英語でお茶を濁すことはできるが、ヨーロッパでは各国の伝統文化を尊重するという態度で滞在することが肝要である。

当時のヨーロッパは通貨も各国で異なっていたので、両替の時などは計算機を片手に間違わないように交換レートを見ながら損をしないようにとあれこれ思考しながら旅行小切手にサインをしていた。現在はユーロが普及し、イタリアのリラ、フランスのフラン、ドイツのマルク、或いはスペインのペセタといった通貨の単位は過去の話となった。筆者が旅行していたときはまだクレジットカードによる決済は一般的でなく、すべて現金か旅行小切手で支払っていた。50年代の日本円がまだ三等国家の紙幣である時代から見れば、当時ですら自国の紙幣を外貨に現地で両替できるということ自体が隔世の感があった。現代の若者からすると日本と西欧とが対等に通貨の交換ができるということ自体あまりに普通のことのように思えるかもしれないが、終戦で国土が焼け野原になった状態から復興して経済大国になった日本の目覚ましい発展の一つの姿でもあった。

若い皆さんは何時でも海外に行ける非常に恵まれた環境にあるといえる。学生時代にアルバイトでお金を貯めたり、奨学金に応募してみたりして是非とも日本とは違う文化や風土に触れてほしいものである。最近のマスコミの報道によると海外へ留学や旅に出る若者が少なくなったということであるが、海外へ目を向けるのは自分の視野を広めるだけでなく、自分の可能性や将来の展望を開くという意味で非常に有意義なことである。最近の若者は夢がなくなったと嘆く声がよく聞かれるが、海外で自分の進路や夢を見出しているケースは非常に多い。なぜかという海外に出ると常に自分の考えを主張しなければならず、必然的に自分の置かれている状況を深く見つめ直さなければならなくなるからである。

嘗て日本で知の巨人といわれた故加藤周一氏はヨーロッパを旅してまわることで日本の伝統文化を見つめ直すきっかけとなったと生前インタビューなどで語っていた。加藤氏は東大の医学部の出身であるが、学生時代はテニスと読書に専念し、友人と読書会を開き討論することで広い知識を身につけたといわれている。また、加藤氏は自身の学問の必要性から、英語、フランス語そしてドイツ語に関してはどうしても読み書きそして、話す必要があったので自身でこれらの言語を身につけたといわれる。カントやヘーゲルの著書を読み、その内容をドイツ語で語りながら或いは、デカルトやモンテスキューについてフランス語で議論しながらその内容の誤りを指摘してもらいながら自身の語学力のレベルを西欧人のレベルに伍していけるほどに引き上げたのである。加藤氏は生前英語教育論争で上智大学の渡部昇一氏とNHKの番組で討論したことがあった。筆者はまだ当時大学を目指し受験勉強中であったが、当時の議論は今でも鮮明に覚えている。英語教育論争では教室で実用英語を教えるか、或いは教養英語を教えるかという論点からの平泉渉氏との討論が英語教育史上有名な語り草になっているが、筆者としては加藤氏と渡部氏との間で行われた討論が的を射ているように思えた。加藤氏は当時の英語教育でも既に現われていた話す能力を重視すべきという傾向に対して、単なる表層的な会話主義を痛烈に批判されていたように記憶している。当時の英語教員

が受験指導に重きを置いていたので、海外で英語を使って仕事をして帰国した人々にしてみると教室内での英語が文法や訳読中心で、教師の英語の発音が悪く、生徒にやる気を失わせているのではという指摘に対して、仮に会話を中心に教室で話せる能力を養成しようとしたところでせいぜい缶詰の横文字を読める程度にしかないだろうから、それなら英語を話すことに無理に拘泥せずに、まず母国語の習得に専念したらどうかということであった。これは最近の総合学習の時間の時間の使い方に対する一つの示唆になると思われるが、加藤氏はフランス人の論理明晰性は幼い頃よりの母国語で整然とものを考え、そしてその考えを文字にして書いてみるということの地道な積み重ねが、過去の偉大な思想家を生んでいるのではないかという指摘をされていた。その分りやすい例がジャン・ジャック・ルソーではないかということであった。確かに最近の兎に角英語やフランス語、或いはスペイン語や中国語を喋ることができればそれで国際的な精神が得られるという安易な傾向に対する警鐘を70年代当時でも鳴らしていたことは容易に想像できる。

当時上智大学教授であった渡部氏は、外国語を学ぶことは自分の頭に全く異質なものを取り込む訓練になり、日々の地道な学習が必要で、世界史のように一夜漬けで勉強ができないことが本人の知的レベルを知る最も良い科目であると述べておられた。大学側の統計的な資料として、難しい英文を正確に訳せる生徒が後に人文科学や社会科学における様々な科目を大学で履修した時にそれなりの良い成績をあげられる要素となると大学教員の立場から指摘されていたことを今でも鮮明に記憶している。頭の思考訓練に異質なものを取り入れて一生懸命に知的格闘をすることがその人の後の人生にとって大いにプラスとなると訴えておられた。特に数学の因数分解の例をあげて、なぜ因数分解を学ぶかといえば、決して世の中に出てからすぐに役立つからというのではなく、論理的なものの考え方や分析を社会人になってからできるようにということを指摘されていた。

それに対して加藤氏は数学を学ぶ目的は性質が異なり、世の中に出てから役に立つかという視点での議論としては譬えがふさわしくないという指摘をされていた。なぜなら因数分解でのXYという前提はすでに抽象の世界に入るということを意味するからということのようであった。素人からするとこの辺の議論は難しく理解が覚束ないかもしれないが、加藤氏は哲学や思想を語るくらいに学習する目的意識のある生徒を中心に外国語を教えるべきという立場を貫いていたように思える。単に会話をやりたいのなら中学・高校から大学まで10年近く、英語を学び、缶詰の横文字しか読めないのであればそれは時間の無駄であると仰りたかったのであろう。渡部氏はこの目的意識のある生徒のみに教えるというエリート教育化に真っ向から異論を唱えられていた。教育の機会本来平等に与えられるべきもので決して特定の科目が特定の集団のみに提供されてはならないのである。今日でも日本人の生徒全員が等しく英語を外国語科目として受講出来るのは、過去にこうした議論がなされていたからであるともいえる。それに70年代の英語教育論争の中には、大学の受験科目から英語を外して欲しいという一部の声から当時何人かの有力な人物が動いていたという噂もあった。

今にして思うと70年代当時でも大学の受験科目に英語が大きな比重を占めていたために英単語を

覚え、訳読のために英文法を徹底的に学習したことは現在の自己の能力を向上させる大切な要素となっていたことを実感できる。当時は英文解釈のために国語の語彙や根気強く学び続ける忍耐力なども身につけようとしていたのではないかと思う。事実、毎日規則正しく学習を続けるという習慣は当時のこうした姿勢から身につけたように今にして思うと納得できる。筆者自身、アメリカ東部の大学院で英語教育法を学んでいたときに、日本人が英語を学ぶのは何も英語そのものが出来るようになるからではなくて、英語の学習を通して忍耐力や集中力を養成しているのだと意見を述べたことがある。アメリカ人の教員がなぜ日本人は英語を10年も学習して、会話一つ満足にできないのかと指摘されたので、嘗ての英語教育論争を思い出して日本人の英語教育観を述べてみたのであった。この発言に対してはそのアメリカ人教員も周囲の英語を母国語とする学生も全く納得しない様子だったが、この文法訳読の学習が、日本の教育水準や識字率のレベルを高めたことは否めないであろう。今の若い世代の皆さんには実用英語主義と訳読文法主義などといってもあまりピンと来ないかもしれないが、語学教材や会話スクールが満ち溢れている現在の日本の恵まれた環境は過去におけるこうした流れの中で日本が一度経済大国になり、生活にゆとりが生まれ、現在の本質的な英語教育論へとつながっているのである。

最近では、誰でもお金と時間があれば、海外に行ける時代となっている。確かに長期で海外に出かける若者の数は減少しているが、観光や休暇を過ごす目的で出かける人は多い。一昔前のように、海外で言葉や文化をある程度学んでから帰国するといった気あいはあまり感じられない。筆者が大学院に在籍していた頃はよく指導教授から海外の大学院で現地の教授に自分の修了論文を見てもらい、それに手直しを加えて博士論文にして提出しなさいとよくアドバイスを受けた。周囲にも当時TOEFLのPBTを受験し当時のスコアで最低でも600点程度を獲得後、留学しアメリカの大学院で論文の書き方や日本の大学院で読まされる量の数倍の文献を読破し、自分の専門分野を確立し、現在日本の大学で教鞭を執っている同期の人間が何人かいる。現在では日本の大学を終了してからアメリカへの大学院に進む若者の数は減ってはいるが、海外で学位を取りたいと考える若者はいる。単なる憧れや短期の観光ではなくその土地にある程度腰を据えて研究や学習に励むというのは、文化の違いを乗り越えて、様々な背景の人々と交流するという側面を含む。

故遠藤周作氏が「留学」という著書の中で、日本の大学で仏文学を講じている主人公が初めて憧れのフランスに赴き、意思疎通に苦勞する様子が描かれている。日本では大学教授として尊敬される主人公が、シャルルドゴール空港に到着すると相手の言っているフランス語が全く聞き取れない。主人公は自分の大学教授としてのプライドが完膚なきまでに打ちのめされる経験をする。何とか目的地の住所にたどり着くが、そこでも似たような境遇の日本人研究者に出くわすこととなる。大学で難しい仏文学を講じていても、街角でフランス人が普通に話す言葉が全く聞き取れないのである。恐らく皆さんもスーパーマーケットなどでレジの人が何気なく聞いてくるのが全く理解できないことがよくあると思う。受験で4000語記憶したと思っても、街角で使われている表現が非常に難しく感じるのではなかろうか。「留学」では、海外に出てしまうと全く無力になってしまう

人間のサガといった主題を扱い、自分の身分がある日を境に母国における高い地位から一気に転落してしまうという境遇をシニカルに描いている。国内では周囲の人々が敬意を持って接してくれるが、日本を一步外へ出るとそこは誰も知らない人々の暮らす社会であり、自分の語学力が唯一自分を守る武器になるのである。

日本がバブル経済で浮かれていた時代にも、日本の企業から多くの日本人が海外に赴任し、現地でも日本人同士が小さなコミュニティーをつくり、日本語だけで生活し、現地の人々と交わることもなく、英語が上達することもなく数年後に帰国してしまうというパターンがあった。当時の海外赴任者の声もあったかどうかは定かではないが、中学や高校の英語の教科書が会話体になったのも、その辺りを境にしてである。学校で英語を習っていたのに海外で英語が全く聞き取れず、言いたいことも上手く表現できないので、学校では会話を中心に教えるべきだという声が高まり、教科書の内容から偉人伝やエッセイといった頭を使って読み解くという要素が希薄になっていったように思える。以前であれば、仮定法や動名詞、或いは分詞構文といった複雑な文法概念を学んでいたのも、哲学書や科学論文なども論理をたどりながら読み進めることができたのであるが、バブルの頃を境にして英文読解の力が低下しているようである。

TOEFLの得点率を見ても日本は東アジアの中では最底辺に留まっている。従来日本人は文法や読解に強いとされてきたが、今ではその分野の実力がアジアの他の国々に比べ落ちているのである。ヒアリングも日常会話のできる人が増えているとはいえ、TOEFLのような学術的な内容となると全くのお手上げである。日本がかつて発展途上国と呼んでいた国々からの留学生は欧米の大学において真剣に学んでいる。語学力を上げながら、専門分野の勉強に日夜励んでいる。彼らは自分たちの母国の発展は自分たちの勉強の成果にかかっているという意識から自分の国を代表して海外で学んでいるという気持ちが強い。多くの日本人のように憧れの国でグルメや観光を満喫したいという考えの人は少ないように見受けられる。

英語圏以外でも同様で、現在フランスには、中国や韓国などアジアからの留学生が多い。彼らはすでに英語を習得済みで、そのうえでさらにもう一ヶ国語というパターンの学生も多い。彼らは将来フランスと関係した企業に勤めたいという明確な目標から現地での厳しいレッスンについてきている。フランスの語学研修では基礎レベルでもすべてフランス語で授業するため、ある程度日本で文法の基礎を学んでいかなないと授業についていくことが難しくなる。少し授業が進むと教室内で意見を発表したり、時事問題について調べなければならなくなる。フランス語を学習することはフランスの文化や価値観を身につけることと現地では考えられているからである。最近フランスにも夏期講習に参加する日本人学生はいるが、多くはフランスに対する憧れから参加しに来るため、周囲の他の国籍の学生とはいささか温度差がある。教室内で国際関係や文化論の話となると日本人は発言を止めてしまう。本来文化が違うので必然的に討論の場となる筈であるが、他人との討論を好まないのか、自分が傷つけられたくないのか日本人学生は討論には消極的である。欧米や他のアジア圏からの学生は意見があれば積極的に議論に加わる。意見を述べることで自分の存在をアピールし、

自分が常にその場に何らかの形で関わっているということを証明しようと必死に訴えかけているようである。当然現場の教員はそのような積極的な学生を評価するので、日本人の存在は希薄になり、授業は欧米の学生を中心に進められるということになる。日本人学生には何としてでもこの壁を打ち破り新たな文化交流の境地を切り開いてもらいたいと思っている。決して難しいことではない、人それぞれ文化が異なれば価値観は異なるので、まず意見を述べてお互いの違いを認識することから歩み寄りを始めるのである。

これは自分の体験であるが、以前フランスの大学で文明論の授業に参加していた時があった。その講義では欧米系の学生達が主流を占める雰囲気であったため、何としても欧米中心の雰囲気を打ち破りたくて少し強引に日本人の謙遜さといったものを忘れ、ひたすら自分の思いを伝えるように質問をぶつけてみた。200人くらいの受講生がいた講堂であったが、奇妙なアクセントのフランス語がその講堂内に響き渡った。欧米系の学生たちのフランス語はお互いに発音の癖が似ているので分かりあえるが、アジア系でそれまで全くと言っていいほど大人数の前で発言しない傾向にある日本人のフランス語は彼らにとっては異質に聞こえた筈である。発言している最中でも背後で少しざわめきの様な声を感じられた。アジア系の学生はこのような場では発言しないものだという暗黙の了解でも彼らの間にはあるのであろうか。むしろそうした仕打ちを受けるとこちらも燃え上がる方なので、欧米中心主義といった牙城を打ち砕くべく彼らにとって異質な論理や価値観を常に提示するように心がけた。確かに、冷たくあしらわれることもあるが、真に向学心があり、異なる価値観に耳を傾けようとする成熟した心の持ち主ならばこのような交流の機会は意義深いと感じるはずである。このような段階に入ると分るかと思うが、もはや語学力などというレベルの問題ではなく、対人間の価値観のぶつかり合いの中からどのようにしてお互いの接点を見出し、そこから新たな協調の道を探っていくかということになる。残念なことに日本では国際教育などと唱っていても内容的には語学力養成の次元で止まってしまうことが大部分である。文法や解釈の正確さに重きを置きすぎて、議論することは不必要なことだという思想が、日本の教育では今だに支配的である。お互いに傷つけあうことを恐れての習慣なのか、或いは相手の顔を立てるという意味での気配りなのか、今のボーダーレスな時代では通用しない内向きの論理である。お互いに意見を述べ合って、少しづつ成長していくのだという前向きな発想に転換していく必要が今の日本人には必要である。このような発想の転換を可能にする一つの手段が、外国語を学ぶということなのである。

フランス語集中講座での最後の授業がある意味非常に印象的であった。その時のトピックはエスペラント語の歴史についてであったが、アメリカやカナダの学生はエスペラント語というとその存在すら知らない様であった。担当教員がこの話題を授業のまとめとして取り上げたのは言語の多様性や未知の文化に対する好奇心を絶えず持ち続けて欲しいということだったと思うのだが、英語圏の学生の反応はいま一つであった。英語という国際社会で広く通じる便利な言語があるのになぜ今更別の国際共通語を作り出そうとするのかとあるアメリカ人の学生は述べていた。確かに現在の国際社会の言語事情を見るとどこへ行ってもある程度英語は通じる。しかしなぜ英語が世界中で

通用するようになったかという過去の経緯をよく考えてほしいとその時思った。外交・軍事力の強大な国の言語が国際社会で支配的であったのは世界史を振り返ってみると明らかである。かつて日本が経済大国であった時代に世界中に経済進出しつつ、同時に国連の常任理事国入りをもっと強力に推し進め、国連の公用語に日本語を加えてもらえば、日本の国際社会での立場は非常に安定したものになったのかもしれない。一部にそうした声もあったが、アジアの国々の気持ちを考え、当時の政治家達はそうした働きかけをしなかった。過去の歴史を振り返ると日本語が国連の公用語になり難い要素は確かに存在する。こうした事情から我々日本人が外国語を学ばなければ国際社会で孤立するのは日を見るより明らかである。数年前シンガポールでの英語教育の国際会議でシンガポールの教育省の役人が「我が国は狭い国で、これといった資源もないため、教育こそが国を発展させる唯一の大切な手段となる」と述べていた。その教育の基盤に外国語の習得があるのだということも強調していた。日本も事情は異なるが、資源のない国が将来発展していくには何が大切かお分りのことと思う。日本は島国で外との接触が今まであまりなかったからこそ外国語を学び、他の国々と交流し意見交換していく必要があるのである。お互いが胸襟を開き、相手の言葉に真剣に耳を傾ける雰囲気ができるときにお互いがともに成長できる基盤が確立されるのである。外国語の習得がその一助になればと思っている今日この頃である。皆さんは頭の柔軟な時代に外国語という異質な要素を学ぶことで思考を鍛え、日本を国際社会で孤立しないように舵取りを自ら行ってほしいと願っている。